

僕の辞書から

明け暮れた労働の日々

社会という絶望から僕は全力で逃げた

そこにあっただのは雇われる必要が無い

自由な世界だった

就職が消えた日

- 会社に依存する必要は無い
- 上司の命令も聞く必要は無い
- もうスーツ,ネクタイ,全てが要らなくなる

お金も,時間も,心の余裕も  
全てを自分の思い通りにデザインする

サラリーマン  
第二の生き方

## はじめに

これまでは、会社で働く事＝生きて行く唯一の手段。そんな風に信じて疑わなかった。会社に雇われずに生きる人は、極わずかで親がお金持ちの恵まれた環境に居るか、宇宙人の様な才能を持ち合わせて、大きな会社を作るか。このどちらかに一つだと思っていた。

当然僕にはそのどちらも持ち合わせて居なかったので、会社に雇われずに生きるなんて夢の話。そう思っていた。しかし、確かに会社に雇われずに、個人で稼ぎ、自由に生きている人間はここに居る。

僕はサラリーマンの頃からそうだったが、朝が極端に弱かった。無理矢理起きると、吐き気を催すレベルだ。そして朝は、極端にネガティブに陥る。これから始まる憂鬱な一日に、見を投じなければ行けない。朝の時間は、そんな気分が当然襲いかかる。その気分をぬぐい去る為に、無理矢理シャワーを浴びる。それがサラリーマン時代の朝の習慣だった。

しかし今はどうだろう。会社に出勤時間を強制されている訳ではないので、何時に出勤しても構わない。（出勤という言葉さえ無いが）だから毎日起きるのは12時過ぎだ。僕の朝はヒルナンデスとともに始まる。超限定マーケティングやら、主婦の弁当の作り方、3色ショッピング等、ヒルナンデスのことなら、大体分かる様になってしまった。

また上司にいびられる事も無くなった。目の上のたんこぶの様に、部下の失敗をコソコソ狙う様な上司は、そこにはもう居ない。誰にも文句を言われる事無く、自宅で好きな音楽を掛けながら活動しているし、パソコンを打つ時は、横ですべらない話などをスマートフォンで流しながら作業している。笑ってしまっ  
て作業が止まってしまう事があるが、それもまた良い。

ノルマも無く、誰かに強制される物でもないし、自分が好きにやっている事なのだから、苦にならない。自宅を改造しようと、デスクの上にコーヒーメーカーを置き、足裏マッサージ機までセットした。さながら子供の秘密基地のようだ。

また体調が優れなかったり、気分が乗らない時は人間誰しもある。そんな時は無理して作業をする必要も無い。先日あまり気分が優れなくなったので、昼間からyoutubeを見始めて、ドラマを1つ制覇してしまった。そんな日が1日や2日ではない。

また僕の夢は「世界を回ってみたい」という夢を持っていた。そんな夢を叶えるべく、色んな土地を巡った。予定も立てずに朝の思いつきで旅行に出かけることも少なくない。会社に雇われる必要がなくなってからはそんな生活を送っている。

鉄のように重い体で朝早く起きる必要がなくなった。

パンパンに膨れ上がる電車に乗る必要がなくなった。

囚人服と同義語のスーツを着ることがなくなった。

家と会社だけを往復する日々が消えた。

いびり続ける上司もいなくなった。

胃がキリキリするノルマがなくなった。

嫌なお客にペコペコする必要もなくなった。

僕の辞書から「就職」がなくなったのだった。

自分は贅沢的な性格では全くない。大学生の頃なんて、月2万円あれば生活出来た。これは子供の頃、裕福ではない家庭環境で育ったからなのだろうか。今でもその甲斐性は変わらない。

ではなぜ、こんな自由な日々が突如として訪れたのか。宝くじでも当たったのか。ギャンブルで勝ったのか。決してこれらは正解ではなく、ある出来事がきっかけで副業を始めた。その副業から月100万円以上を振り込まれるようになった。ある1日ではサラリーマンの3ヶ月分の給料が、わずか1日にして振り込まれることもあった。

その副業で稼げたことがきっかけで会社を辞めてしまったのだった。どうやら月収で100万円を超えると、法人化した方が節税対策になるらしい。そして僕は起業家という肩書きになるらしい。自分では全くそんな自覚はないが。

起業と聞くと、何やら大きなビジネスを思い浮かべる。しかし社員を雇っているわけでもないし、事務所を構えているわけでもない。インターネットが繋がっていればどこでだって仕事ができる上、パソコン1台で完結するため社員を雇う必要性も特にない。借金をして起業したわけでもないし、せいぜい始めに用意したのは3万円もなかった状況だったと思う。

それを聞くと「あなただからできたのでは？」という声が必ず届く。始めに行っておくと決してそんなことはない。いやむしろ僕は多くのハンデを背負っていた。平凡以下の人間。それが僕だった。

その証拠に、ある日突然僕の家族は崩壊した。住む家もなくなった。住んでいたマンションは売り払い、部屋が大分狭くなった賃貸マンションに住み替え、当時通っていた大学も中退せざるを得なくなった。

大学を中退し就職してからは月16万円の給料のために1日14時間働いた。気温差20度以上の工場で缶詰状態の中働いていたこともあった。僕にあったのは「自由になれたら」という夢だけだった。

これを見ているあなたと同じ状況に僕も数年前まで居た。サラリーマンでの仕事が大好きならそれに没頭するのも良いと思う。昇級を目指し、会社に身を投じたい。そんな人にお伝え出来る事は、残念ながら無い。

僕はもっと自由に生きたかった。労働と言う地獄の様な日々を抜け出したかった。夢を追いたかった。趣味に没頭したかった。友達と夜まで遊んでたかった。

サバンナに生息するあるトカゲは、子供を産んだ瞬間に、その子供を手放すと言う。小さなトカゲは、生まれた瞬間から、猛獣達が住むサバンナで生き抜く事を強制されるらしい。誰にも守ってもらう事が出来ずに。これは当時の僕の状況と凄く似ていた。

会社に依存する事だけが生きる道ではないし、自分の好きな事をやって生きて行く事はだれにだって出来る。趣味や夢に没頭する人生を送ることだってできる。だから同じ状況に居て、苦しんでいる人に何か伝えたい。1日12時間以上の労働を課せられたブラック企業でどのようにして抜け出すことができたのか。「夢や趣味に没頭する自由な人生」を送るにはどうしたら良いのか。

超絶ブラック企業で働く平凡なサラリーマンが、人脈もなく、コネもなく、スキルもない状態から、パソコン1台のたった1人で月152万円以上を稼ぎ続けるようになった経緯をこれからお話ししようと思う。

## 平凡な家族に訪れた悲劇

## 突如として光を失った

不安も、不満も、何も無い学生時代。幼少期から活発な少年で、サッカーに明け暮れる、どこにでも居る少年だった。自営業で美容院を営む父と、それを手伝う母。四つ離れた兄との四人家族だった。小さい頃によく喧嘩していた兄とは高校を卒業し、大学生になった頃には世間話をするほど仲が良くなっていた。

小さな駅の商店街に美容院を営む父と母は、端から見ると仲が良さそうには見えなかったが、特段仲が悪い訳でもなかった。同じ場所で、何時間も働いていれば希薄な関係でも致し方ない事なんだろう。本当によくある四人家族だった。

小さな美容院と言う事だったため、特別に贅沢をさせてもらう事は無かったが、食べる物に困りはしなかったし、電気やガスが止められたり、お笑い芸人にあるような壮絶な過去なんて全くの無縁の物だった。

僕が小さい頃、父の美容院で髪を切ってもらう事が当たり前だった。髪を切ってシャンプーをしてもらう時には、ぐっすり寝てしまって、起きたらバックヤードに横になっていた事も一度や二度ではなかった。周りの子供達とは違い、髪を自由に切ってもらえる事は、少しおしゃれの先を行っている気がして優越感もあった。

物心を尽き始めた小学生時代。思った以上に髪を切られ、泣きながら両親に詰め寄った事もあったが、今考えれば一つの幸せだった。両親は共働きなので、家の帰りが遅い時が多くあったが、父の美容院へ行けば、二人の姿はすぐそこにあった。この小さなお店は僕のアイデンティティーそのものだった。自宅のマンションと、父の美容室。これが小さい頃から帰る僕のふたつの家だ。

そんな極普通の事が「幸せ」と感じれる年齢になる前、仲睦まじい四人家族に、突如として悲劇が訪れた。「店を畳まないといけないから今住んでいるマンションを引っ越さないといけない」母親からの言葉だった。

僕は当時大学生。遊びたい盛りで、特にやりたい事があって、大学に入った訳じゃなかった。確かに入学するとき、母親が親戚中に電話している姿を見ていた。入学金の工面を必至にしている姿だった。「お店を畳む」という言葉を聞く数日前、洋服が好きな母親が、大量の服を自転車のカゴに入れて、どこかへ行くのを見た。でも、そこまでお店が追い込まれていたなんて信じても見なかった。「美容院を畳む」その言葉を聞いた瞬間、将来の希望も、未来の生活も音を立てて崩れ落ちて行った。

「小さいときから、髪を両親に切ってもらっていたあの店はどうなるんだ」

「気持ちよくて途中で寝てしまう、あのシャンプーはもうしてもらえないのか」



「そんな自分の事よりも、五十歳を超える両親はまた就職活動するのか」

「五十歳を超える年齢で雇ってもらえるのか」

「雇ってもらったとしても、僕と同年代の上司にアゴでこき使われてしまうのか」

僕なんかより、歳を取った両親の事が一番に頭をよぎった。親父は小さな美容院を守る為に、僕たち家族を守る為に一年ある内、休みは五日ほどで、そのほとんどを労働に費やしていた。小さい時から、家族団らんで旅行なんかした事は無く、両親は常に仕事尽くしだった。でも、もうダメだったみたいだ。

## 坂道を下る敗戦処理

そこからの日々は怒濤の連続だった。親父は膨らんだ借金をどうにかする為に、弁護士の先生と毎日相談をしていた。夜中になると、不動産屋から電話が鳴り響いた。「マンションを売りたいなら、俺たちに売らせてくれ。」「オマエラは住む所がなくなるのだから、俺たちが探すよ。」これが不動産からかかってくる電話の用件だ。この電話が、唯一光を照らす食卓を、より一層暗くさせた。

僕のアイデンティティーそのものだった美容室が潰れる事を、この時は想像出来ないでいた。が、ふとリビングに転がるデジカメが、僕に「美容室は潰れる」という現実を突きつけた。デ

ジカメのデータの中には、僕が小さい頃から髪を切る為に座っていた美容室用のイスの写真があった。その他にもお店で使うパソコンや美容師道具が諸々写真データとして、デジカメには納められていた。そのデジカメの写真は、美品を最後の借金返済用に、売る素材の為にとすぐに悟った。

そこから父は自己破産をした。借金は、到底返せる金額ではなかったみたいだ。当然自己破産すると、持ち物は全て売り払わないと行けない。住んでいるマンションなどもこれまで通り住む事は出来ない。

通常、引っ越しをするとなると、新しい新居に胸を躍らせたり、新しい友達が出来るとか、楽しい妄想を膨らませる物だろう。しかし僕たち家族の引っ越しは、少し訳が違った。小さいときに、マイホームを購入して、わくわくした心境で引っ越しのとは訳が違い、生きるため、生活して行くための家を探すだけ。キッチンが綺麗で使いやすい。自分の部屋が広い。お風呂が広い。全て二の次で、四人が暖を取る事が一番の目的だった。

引っ越し当日。これまで十年以上住んだ家から出て行く日。僕は立ち会いに参加しなかった。いや参加出来なかったという方が正しいかもしれない。親父が一人立ち会いに参加し、僕と兄、そしてかあちゃんは別の場所で荷物だけをただ待った。

僕が小さい頃は、ドラゴンボールが大好きで、いつかはスーパーサイヤ人に成れる物だと思っていた。だから幼稚園の頃は、かたくなに襟足を切るのを拒み、いつか成れるヒーローとやら

に憧れていた幼少期。全世界を救う事は出来ない。と、歳を取るごとに悟ったにしろ、家族の大ピンチ。ましてや親父や母親は五十歳を超えた年齢にして職を失う。だからこそ、小さな家族の助けに成りたい。そう思い、当時通っていた大学を中退し、働く決意をした。子供の頃描いた、宇宙人と戦うヒーローでは無いけれど、身近な家族だけで良いから守りたかった。

友達と遊びたかった。好きなサッカーに没頭したかった。サークルにも入りたかった。興味がある勉強の分野を見つけ出していた。だけどそんな事は言ってもらえない。全て二の次だ。何にも代え難い、「家族」のピンチなのだから。当然、のうのうと学生生活を送る事は出来ないと悟った僕は、同年代より一足先に就職活動をした。けれど僕は、漫画に出てくるような、カッコいい主人公には成れなかった。

## 労働監獄

### ここで僕は名前を失った

最初の労働は、有名な配送サービスの仕分け作業だった。ここで僕は名前を失った。ジブリ映画の千と千尋の神隠しでは、主人公が名前を無くす設定があるが、そんな映画の世界が本当にそこには広がっていた。初めて務めた工場では、働いている従業員に、ビブスを着せられ番号がかせられる。僕たちのような下っ端の名前を呼ぶのは贅沢かの様に、名前で呼ぶ事はせず、常に番号で呼ばれた。「5番こっちこい。」「7番あっち行っ

て仕分ける。」「20番サボるな！！」そんな怒号が工場内を包む事が当たり前で、その光景に働き初めの僕は度肝を抜かれた。

工場内に張り巡らされたベルトコンベアから流れてくる荷物を、各レーンに仕分けるのが僕たちの仕事だった。ベルトコンベアの位置も、すねぐらいの高さで、身長が高い僕には、腰を常にかがませなければ仕分けられない。一秒間に一個と言うペースで、膨大な量の荷物がベルトコンベアに乗っては流れてくる。軽い段ボールならまだしも、流れてくる物は鉄のかたまりや大量の水が入ったボトルケースなどが大半を占めた。素早く押し引きし、各レーンに流し込まなければ、番号で指名され、「サボるんじゃねえぞ!!」と僕たちを怒号が包む。

休む暇も無く、次から次へと流れてくる荷物は、僕らの額から大量の汗を流した。その時期は真冬で、工場は扉も無く路面に面している。そのおかげか気温ゼロ度前後なのにも関わらず、汗は止まらない。中腰の姿勢のまま、数十キロの荷物を永々運び続ける。レーンの荷物は止まる気配もなく。

荷物には、色付けされたシールが貼ってある。それが各レーンに運ぶ目印だ。一秒間に一個のハイペースで流れてくる荷物の色を見極めながら、一つ一つ運ばなければならない。「これは黄色じゃねえだろう!!」そんな怒鳴り声が聞こえてきた。どうやら作業員の一人が運ぶ場所を間違えたようだった。広い工場内が更に緊張の色を強めた。同じ場所を行っては来て、二十キロもある荷物を永遠と運ぶ。感情は余計な荷物となり、不必

要な存在だ。ただ機械の様に、繰り返し繰り返し運べば良い。それがこの工場のしきたりの様に思えた。

一時間は経っただろうか。腰がミシミシという鳴る疲労と、冬場にも関わらず流れる大量の汗とで、時間を計った。しかし、工場内に設置してある時計の針は、二十分しか針を進めていなかった。「まだまだこんなもんじゃない。」ベルトコンベアが唸る音が、そう言っている気さえした。

そんな作業を一日八時間と繰り返す。スポーツ少年で、体を動かすのが大好きだったのだが、腰を曲げ、金属や二十キロの水を永々八時間以上、押したり運んだり、持ち上げたりするのは、本当に重労働だった。まだ若かった僕は一日寝れば、まだなんとか起き上がれるぐらいには成ったが、仕分け作業の中には、おじいちゃんと呼んで遜色が無い年齢の人も居た。そのおじいちゃんも、僕と同様に番号で呼ばれ、重労働をさせられ、歯を食いしばりながら懸命に働いていた。

一日目の休憩時間にたまたま、そのおじいちゃんと休憩が被った。寄せ集めの部屋に、すぐにでも壊れそうなパイプイスが数個。テーブル等は無く、休憩する作業員の人数にも満たないイス。ほとんどの作業員が座る事は出来ずに、部屋に備え付けられているロッカーに背をもたれながら、少ない休憩時間を過ごしていた。仕分け物の中には、生物も取り扱っているのだろうか。二階にある休憩室と呼ばれる倉庫には、一回からこみ上げる異臭が部屋を包み込んでいた。そんな中で休憩し、深夜一時頃にご飯を食べなければ、体が持たない。三十分後の労働の為

に、かあちゃんが作ってくれたおにぎりを、異臭とともに無理矢理ほおばった。

「手作りかい？」そんな風におじいちゃんが話をしてくれたのがきっかけで、休憩室の地べたに座りながら二人で少し話をした。おじいちゃんには、僕と変わらないぐらいの年齢の娘が居るらしい。だから声をかけてくれたのだ。少し老けている外見から、「おじいちゃん」と決めつけてしまった申し訳ない気持ちと、僕の父も美容院が無くなり、同じ境遇で今も働いているのか。と不安な気持ちに苛まれた。

おじいちゃんは、カメラ屋を営んでいた。しかしカメラ付き携帯や、スマートフォンが普及した事により、写真を撮る機会が激減。写真屋にはお客さんがどんどん居なくなってしまった。渋々お店を畳み、仕分け作業員として、働いているのだと言う。

「嫁と娘を食わせて行かないと行けないから、俺が働かないとね」そう言ったおじいちゃんの言葉が、胸に響いた。

少ない休憩時間を、おじいちゃんと話せた事で、少しほっとした。名前も呼ばれずに、自分自身の存在意義が分からなくなっていたこの時は、普通に人として接してくれるだけで、僕には十分すぎる心の休憩だった。

極わずかな休憩が終わり、作業員は各レーンにちりばめられる。「7番こっちこい」7番とはその時、僕の付けていた番号だった。トラックから荷物が運ばれて来て、各場所へレーンを伝って流す。そのトラックからレーンに移動させる場所へ誘導させられた。四トントラックの荷台には、これでもかと荷物が

溢れている。ゴミ屋敷に転がるゴミの全てをトラックに入れている程の量に見えた。

荷物の中には、何に使うのか分からない貴金属。大量の飲料水。雑誌がたんまりと入った段ボール。これらが所狭しと並んでいる。工場内に張り巡っているベルトコンベアへ、トラックの荷物を移動させなければ行けないのだが、トラックのある場所と、ベルトコンベアまでの位置には少し距離があり、これらは全て人力で運ばなければ行けない。「若くて体がデカいから」おそらくこれが理由で、工場一の重労働を任せられたのだろう。これが働くと言う事だ。文句を言う暇も無かった。

トラックの運転手が、一つ一つ荷物を検品し、間違いが無かったらベルトコンベアに載せる為に手で持ち運ぶ。一つの荷物で二十キロ以上あるのが当たり前だ。トラックの運転手は手伝ってくれる事は無く、バインダーと鉛筆一本を持ち声を出すだけ。その指示をとにかく聞いて、僕はベルトコンベアまでの道のりを往復し、トラックの荷物を運ぶ事をただ繰り返した。

おそらく五十往復以上した時だろうか。「パリーン！！！」と何かが割れる様な音がした。トラックの中に居て、工場内の景色が見えない位置に居た僕は、深夜の工場にこだまする音に驚き音のする方へ視界をズラした。音の先に居たのは、あのおじいちゃんだった。視線の先には、平謝りするおじいちゃんと、二回り以上若い社員が、頭を叩く姿があった。

「お前どこ見てんだよ!!」「この荷物を受け取る相手方になんて言うんだ!?」「こらああ!!」怒鳴り声が工場に響き渡り、近くに居る作業員も背筋を凍らせていた。そのまま、若い社員に

首根っこを掴まれたおじいちゃんは、奥の事務所の様な場所に連れて行かれた。

「あっ」そんな小さな声を出し、僕の名前を呼んでくれたおじいちゃんに何かしないと、と止めに行った僕をトラックの運転手が怒鳴りながら静止した。「こっちにはこっちの仕事があるだろ!!」「持ち場を離れんじゃねえよ!小僧!!」

一日目の新人には、ミスをかばうほどの力は無かった。

他の人のミスを、無い事にする事が働くと言う事なんだろうか。大人とは非情に生きる事とイコールなんだろうか。理不尽を理不尽のまま受け入れる事が、労働と言う事なんだろうか。

それまで社会に出て働くと言う事を何も知らなかった若者には、理不尽のまま受け流す事は出来なかった。しかし、そんな頭がこんがらがった状態でも、労働は容赦なく続いた。

## 地獄の始まり

二十キロの水や鉄のかたまりを永々ベルトコンベアまで運ぶ往復を百回ほど終え、やっとトラックから出し終えたとき、「7番!次ぎこっちな」と社員が僕を、別の持ち場へと案内した。

そこは工場の中間地点にある、ベルトコンベアの分かれ道がある場所だった。ベルトコンベアが左右に流れる、この分かれ道では、運ばれてくる荷物がキレイに流れない事がある。この分かれ道で、順調に流れて行かないと、工場の奥の方まで荷物が行き届かない。その為にベルトコンベアを、この分かれ道で



監視して、荷物を流し続ける。それが7番にかせられた仕事内容だった。

トラックからゴミ屋敷分の荷物を運び出す事で、僕の腕は肩から上には上がらない状態だった。重い荷物を運ぶ為には、体の中で一番腰を使う。腰を動かす事で、ピキピキっという音が鳴り止む事はもう無くなっていた。

すねほどの高さで機会音を上げ、流れてくるベルトコンベアの荷物を押したり、持ち上げたりする事は、常に中腰、いや空気イスに耐える様な体制で待ち続けないと行けない。さっきトラックから流した二十キロ以上の水の固まり、鉄のかたまりが、ベルトコンベアに流れてやってくる。力が十分に入らない体制で、腰に全ての力を預け、ベルトコンベアからの荷物を押し続けた。真冬の深夜の作業にも関わらず、僕の額から汗は止まらなくなっていた。

休憩無しで、二時間ぶっ通し。朝方、日の出が出て来た時間になって、やっとその日の作業は終了した。一日目にして八時間以上酷使した体は故障寸前。車で言うならボンネットから煙を上げている状態と同じだ。

家に帰り、床に就く時に腰をまっすぐに伸ばすだろうが、横になるのが久しいせいか全身に疲労が浸透した。目をつむっても、頭の中は工場内のベルトコンベアの音が鳴り響き、なかなか寝付けない。やっとの思いで寝付けたと思ったら、起きた時には既に太陽は沈んだ夕方だった。でももう僕は学生ではない。

悠長に休んでは居られない。家族を守らなくては行けないのだ。痛む体に鞭を打ち、準備をして二日目の労働へ向かう準備をした。

二日目、三日目、四日目、段々と日を増すごとに、見慣れた顔の人たちが居なくなった。当然あのおじいちゃんも。重労働と深夜勤の過酷さに、悲鳴を上げて脱落して行ったようだ。でも僕は辞められなかった。「家族の為に」

工場で働き始めて一週間が経とうとしていた。その頃僕は、自力で腰を曲げる事は出来ず、コルセットを巻きなんとか作業をしていた。それでも番号で呼ばれる事はなくならず、コルセットを巻きながら作業する僕を傍目に、「二十三番、今日二時間居残りな。」僕の番号だった。

その日以来、毎回残業が当たり前になり、労働時間は十二～十四時間が通例となった。人が居なくなっていく事に対して、上司は当たり前の顔をしていた。どうやら、人は交換可能な部品と同じだそう。居なくなれば、また増やせば良い。いくらでも人間は居る。だからいちいち名前と呼ぶ事も、覚える時間がもったいないし、番号で呼ぶ方が簡単。そんな理屈だった。

一ヶ月を超える頃には自分でも分かるほどに、顔がこけて来て、目がぼーっと座り始めた。腰の痛みもコルセットを巻いて

も全く意味を成さなくなり、横になっても悲鳴を止めない。体も精神もボロボロだった。

とある日の出勤前に言われた、両親からの「そんなに頑張らなくてもいいんだよ」そんな言葉に涙が流れた。今一番大変なのは両親なはず。心配させまいと、隠して勤めたが、どうやら傍目にも分かるほどの変わりようだったみたいだ。そこから僕はもう通えなくなった。体が全く動かず、あの工場へは行けなくなってしまった。でも家族を守らなくちゃ行けない。休んでいる暇はないと自分に言い聞かせ、次の仕事をすぐ見つけ働き倒した。そこから色々な仕事をして来た。

## 狭い閉ざされた世界の中で

次に働いたのも、仕分け作業員としてだった。貴金属や飲料水などを仕分けるのは、既に体が持たなかったのを危惧したのか、所属の上司から、軽い物を運ぶ野菜の仕分け工場を紹介された。カラオケや居酒屋、飲食店へと運ぶ為に、店舗ごとに仕分ける。そして仕分けられた食材を、各店舗へと郵送する。そんな仕事だった。

以前の工場とは違い、野菜を扱うので、工場内は常に五度前後の気温が保たれる。寄せ集めの貴金属や飲料水など、重量がある物を持ち運ぶ必要は無くなったが、春頃の外の気温は二十度前後。

冷蔵庫のような工場内に入ると、いきなりマイナス十五度の気温差が待ち構える。温度差に体がついていかず、頭の中ではガンガンと頭痛が止まらなかった。ただ以前の体を酷使する工場より、まだ幾分かマシだと、その時は思った。しかし、労働という荒波は場所を変えても、変わる事は無かった。

最初に与えられた仕事は、タマネギを永遠と袋詰めにする作業だった。十キロごとに小分けし、計りで計測する。十キロに小分け出来たタマネギの袋を、折りたたみの出来るカゴに詰めて行く。五度前後の工場内の隅っこで、ぶるぶる震えながら、四時間もの間、タマネギを袋詰めにした。

手はタマネギの臭いで包まれ、立ちっぱなしの足は、震えを乗り越して棒と化していた。

誰とも話す事は出来ず、タマネギとにらみ合う時間。指先も震え始めて、なかなか袋を掴めない。靴と靴下で覆われた足先は、指に力を入れないと、感覚さえ感じる事は出来なくなっていた。単純作業を永遠とこなすのは、ひたすら根性が居る作業だった。

自分の存在意義は感じられない。何の為にタマネギを詰めているんだろう。タマネギを詰める為に、これからも働き続けるんだろうか。小学生のときの作文で、将来の夢に「タマネギを詰める事」なんて、書いた覚えは無かった。あの時の自分に、今の自分が想像出来るんだろうか。色んな葛藤が頭を駆け回るほどの時間が、その単純作業にはあった。

ただ以前の工場に比べれば、怒号が響く事は無く、番号で呼ばれる事は無い。名前と呼ばれる事も無いが、番号で呼ばれないだけマシだと思っていた。あたりを見渡すと、広い工場が嘘かのように、皆黙々と作業をしている。その工場は、パートさんが多いのか、女性の占める割合が高く、工場には三十名ほどが作業をこなしている。

僕たちにとって、この工場内の出来事が全てだ。ニュースで起きた出来事も、テレビでの話も、全てが別の世界の話。小さいな工場の中で働いている僕たちとは、住んでいる世界が違う。何もかもが架空の話で、工場の中の世界がこの世の全て。そう思えた。

## 小さな灯火

野菜工場での孤独な作業に慣れ始めていた時、いつも通り出勤した。数ヶ月間、タマネギを袋詰めにする事で、一人の社員さんから可愛がってもらえた。その社員さんは四十代の独身で、水口さんといった。

僕がタマネギを文句も言わず、黙々と詰める姿を見て「飽きたる？」と声をかけてくれた。タマネギが八個前後詰めれば、十キロに達し、袋詰めしたタマネギを手持ただけで十キロ有

るか無いかが分かるぐらいに淡々と作業をしていた僕は、理解してくれる人が居るだけで嬉しかった。

そこからトマトのパック詰めという新しい作業を振ってもらえたり、少し工場内を移動する仕事を分け与えてもらった。一つの場所に居座りづけるタマネギ詰めよりも、遥かにやりがいを感じられる仕事だった。足を動かせる事で、寒さから体を守る事が出来たし、トマトのパック詰めはサランラップを使ってパック出来る事から、まだタマネギを詰めるより楽しかった。

僕が休憩している時に水口さんがタバコを吸いにきた時があった。工場を出てすぐの所に、イスが二つだけ用意されていて、イスを向かい合わせた真ん中に、バケツに水を入れた簡易的な灰皿がある。その休憩場所で、水口さんと二人で話をした。

水口さんはその時、既に十六時間勤務中で、いつ帰れるか分からないらしい。上司が許可しないと、帰れないのだと水口さんは言った。その十六時間労働のほとんどがサービス残業で、給料には影響しない。

帰っても好きな事をやる事は出来ず、仕事場の工場と、家とを往復する毎日。パチンコしかする事が無いので、水口さんの趣味はパチンコだけらしい。結婚もしたいけど、出会いが無いし、出会う場所に行く時間も無い。ここで働いている社員は全員同じ。「多分このまま死んで行くんだろなあ。」そんな吐息とも呼べる言葉が、水口さんの口から聞こえた。

二十四時間時間稼働しているこの工場では、十六時間勤務と言うのは日常茶飯事で、発注で忙しい場合、二十四時間ほど拘束される事もあるらしい。

「この狭い工場が俺の人生の全部で、向かいにある幼稚園ではしゃいでる子供達の未来とは全く違う人生だなあ。」 「まだ若いんだから、こんな場所にずっと居たらダメだよ。やりたい事やりなね。」 そんな言葉をかけてもらえた。

僕に取っての世界もこの工場のみだ。他の世界とは別物だ。だけど、一人だけでも理解してくれる人が居る。ただそれだけで、僕の世界は少しだけ明るくなった。

また追い風が吹く様に、その工場内で一人の友達が出来た。名前は田中ちゃん。僕が一人で誰とも触れ合えず、何も仕事が出来ないでたたずんでいる時、進んで仕事を教えてくれて、凄い面倒を見てくれたのが田中ちゃんだ。

タマネギを詰める作業中、「単純作業って退屈だよね？」 「大丈夫？」 と進んで声をかけてくれた。新しい仕事を割り振られたとき、何も分からず茫然としている僕を察して、「こうやるんだよ。」 「また何か分からなかったら、呼んでね。」 そう明るく教えてくれた。

狭い世界の中で、心を許せる人が一人でも居ると言う事が、何より嬉しかった。だから二個上の田中ちゃんが僕は大好きだった。

そんな明るい田中ちゃんが、ある日憂鬱そうにしていた。田中ちゃんと読んでいるのだが、田中ちゃんはれっきとした男性。ただちゃん付けするのには理由があって。田中ちゃんは性同一性障害という障害を抱えていたのだ。

今の言葉で言うおかまだった。その頃は「おかま」という言葉が市民権を得て、世間に認知される様になり始める前の頃だった。

いつも通りその工場に向かうと、田中ちゃんがいつもの明るい雰囲気とは裏腹に、泣きながら仕事をしているのが目に入った。

「どうしたの田中ちゃん？」そう聞いてみると「吉田さんに気持ち悪いって言われた」と泣きながら言う。吉田さんとは、その工場内にいるボスのような存在の人。吉田さんは年齢がそのころ六十代と言う事もあって、「おかま」という人に対してものすごい偏見がある人物だった。

どうやらおかまという存在が気味悪く、男なのに女の子の様に振る舞う田中ちゃんが気持ち悪いと言う事で、「あの子気持ち悪いよね。」と、影でずっと言い回っていたらしい。その頃僕



は、工場の隅っこでひたすらタマネギを詰めていて、工場内の人とは関われなかったので、知る由もなかったのだ。

吉田さんから影で気持ち悪いとののしられる事、数ヶ月間。ずっと田中ちゃんは一人耐えていた。でも限界だったようだ。その日に色々田中ちゃんの過去を聞いたのだが、それは壮絶な物だった。

自分が望んで女の子になりたい訳でもないのに、気付いたら自分は男の子生まれてしまった。本能の思うままに女の子になろうとすると、周りから気持ち悪がられる日々。しまいには家族に「気持ち悪い」と言われ化粧道具を全て捨てられてしまった事もあるみたいだった。

そんな中でも「仕事は楽しみたい」と思って、明るく振る舞っていたのに、主婦のパートの人たちには気味悪がられ、パートの中心人物に「気持ち悪いから寄らないでくれ」と、目の前で言われる始末。本当に辛い人間関係を歩んできたみたいだった。自分が望んでおかまになった訳でもなく、自分が好きで男に生まれた訳じゃない。田中ちゃんがほんとに可哀想で、話を聞いている僕の方が泣きそうだった。

**消えて行く居場所**

それから数日後。田中ちゃんは、工場に姿を現す事は無くなってしまった。初めて出来た仕事場での同世代の友達だった。僕に取っておかまだとか、障害などは関係なかった。同じ立場で、同じ苦しみを分かち合える唯一の仲間だった。だけど、それ以降田中ちゃんのあのキレイな笑顔を見る事は出来なかった。

工場に残った僕にも火の粉が降り注いだ。あいつは田中と出来ている。あいつもおかまだ。近寄らない方が良い。そんなあられもない噂が、工場内でのパート達の間を広がった。疑いを晴らす為に伝えておくと、僕は男が好きな訳でもなく、健全な男だ。

根も葉もない噂には耳を貸さなかった。しかし、女性パート員達が大半を占めるこの工場では、噂話が唯一の道楽だった。田中ちゃんと居る事で、パートの重要人物である吉田さんを敵にしたらしい。それからパートさん達とは、距離を置かれた。

工場の端っこでの作業が少なくなり、工場を行き交う様になると、工場全体の縮図が見えて来た。工場の中心部と僕がずっと居た左部分、また右部分にある大きな作業室。主にこの三つが工場の作業場だ。中心部は他の作業室に比べ、二倍以上広い。この中心部には三十人以上の女性パートが駐在して作業している。僕を除くと、男はほとんど居らず、女性社会が出来た工場だった。

社員は、工場の入り口にある受付に居るため、工場内で発言権のある人も女性だ。当然パートのリーダーである吉田さんに目をつけられると言う事は、この工場内で居場所が無くなると言う事。工場社員が水口さんを合わせ三人ぐらいしか居ないのだが、女性パートに仕事を振ると、影でぼろくそに文句を言う。だから男性社員もあまり強く言えない。

そして最も女性パートが発言権を持っている理由は、工場の中で一番のリーダー格である原田と言う人物が原因だった。原田は工場の中で一番偉いらしい。水口さんを含む男性社員の中でも、一番偉い立場なのだ。その原田と言う人物は、女性パートの中に好きな人でも居るのかと言うほどに、女性を優遇する。その為、僕たち男達は何も言う事が出来なくなっていた。

ある時、野菜工場には珍しく怒号が飛んだ。声ができる方を見みると、水口さんが原田に怒鳴られていた。どんなミスかは分からない。しかし、水口さんが一日中この工場に居る事を、僕は知っていた。働き詰めで意識ももうろうとする中でのミス。誰が悪い訳ではない。

しかし、言い訳をさせる事無く、水口さんを叩く音が工場内でこだました。女性パートも皆、クスクスと笑っている。水口さんはひたすら平謝りするしかなかった。

「大丈夫ですか？」そう原田との一件が落ち着いた時に、水口さんに声をかけた。「大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」  
「俺がミスしたから俺が悪いんだ。」「原田さんには逆らえないよ。小さい声で、そうこぼした。」

それだけ働かせておいて、ミスをしたら休みを返上して働かないと行けないらしい。そして全てはサービス残業。これが大人の世界では当たり前らしい。最初に働いた配送の仕分け工場よりは、肉体労働は減った。いや減ったと言うより、運ぶ荷物の重さが変わっただけだが。それでも少しは体は楽になった。しかし、それ以上に人間関係のドロドロした世界がそこには広がっていた。それを我慢して、理不尽を飲み込む事が働くと言う事なんだろう。

その日を境に、僕や水口さんに対する陰口に拍車がかかる。水口さんに対して、強く当たるリーダー原田とパート達。アイツ使えないよね。絶対に彼氏にはしたく無いね。男としてあり得ない。そんな事を影で言われているようだった。

僕も同様だった。工場中心部に用があり、右部分で作業していた僕が、中心部に行くとパート達にコソコソと何やら陰口を叩かれた。口元を手で隠してはいるが、ほほが上がり、手では覆い隠せないほど、数人でほくそ笑んでいるのは確認出来た。おそらくゲイだとか、ホモだとか、そんな話で盛り上がっているんだろう。

仕事の関係でどうしても聞かなくては行けない事が中心部であったので、パートの中心人物である吉田さんに声をかけた。しかし応答は無かった。連日の対応から無視される事も慣れた。らちが空かない。そう感じた僕は、別の人に聞こうとカカトを返した。その瞬間「どんな親なんだろうね」パートの中の誰かから、後ろを向く僕に聞こえて来た。

もう限界だった。無視する事も構わない。ゲイ呼ばわりする事も構わない。だけど親は関係ない。今僕の家は、大変な状況だ。親父も第二の家だったお店を潰し、借金と戦っている。かあちゃんも二十年近く住んだ家を離れ、好きな洋服を捨てて、家を守ろうとしている。一時期は家にはタウンワークが広がり、ペンで細かくメモをしてあるのを見かけた。

最近では仕事場が見つかって、慣れない中働きに出て行くかあちゃんの背中を見ている。そんな必至な家族をバカにされる事は、自分をとやかく言われるよりも、腹わたが煮え繰り返った。自分の中の何かが音を立てて崩れ落ちて行った気がした。その日以来、野菜の工場に行く事は無くなった。体が拒否反応を起こし、工場へと向かう事をひたすらに拒んだ。

**続いて行く監獄生活**

しかし家族の状況が一変した訳じゃない。休む事を許してもらえた訳じゃない。労働という物は強制だ。逃げれる訳は無い。久々に自宅で髪を切ってもらった。以前あった様な綺麗なイスや鏡は無いけれど、勉強机とのセットだったイスと、手鏡を持ち、お手製の美容師セットで十分だ。

「白髪こんなにあったっけ。」 「凄い増えたねえ」久々に髪を切ってもらいながら、そんな風にかあちゃんに言われた。それでも美容室が無くなった今、かあちゃんに髪を切ってもらえた事が、嬉しかった。「仕事は大変？」そんな言葉に、現状で有った出来事は切り出せなかった。工場であった事は言えず、下唇を噛み締めながら「全然平気だよ」と明るく勤めた。そうだ。僕に休んでいる暇なんて無い。休む事は贅沢だ。親父やかあちゃんも苦しい思いをしながら、戦っている。そう言い聞かせた。

そこから数年、色んな仕事をして来た。不動産営業、飛び込み営業、映像AD。しかしどれも労働は同じだった。毎日十四時間時間労働は当たり前。家と職場の往復が毎日続き、どう頑張っても睡眠は五時間取るのが限度。新宿からの満員電車にぎゅうぎゅうに押し込められ、宙に浮いた事もあった。体調が悪い中、満員電車に揺られたおかげで吐き気を催して、途中で下りた事もあった。

まだ満員電車に慣れない日。カバンは上の柵に載せないに行けない事を知らなかった。少し大きめのカバンを、自分の足の間にはさみ、他の人の迷惑にならない様に勤めた。しかし、人が

押し寄せる朝方の電車内。次々と押し寄せる人並みに、普通に立っている事が出来ない状態となった。足の上に挟んでいるカバンが、ひとりでどこかへ行こうとしてしまう。

カバンが流され他の人の邪魔にならない様に、他のサラリーマンの足をかき分けカバンを握り直した。すると、どこかで自分の手が当たったのだろうか。「邪魔なんだよ！！カバンを下に置くんじゃない！！」「そんな事も知らねえのかよくそガキが！！」そう電車内でサラリーマンに怒鳴られた。

カバンを握り直し、上の柵に載せれるスペースはもう無い。周囲の人に白眼をされながら、「すみません」「すみません」と平謝りするしか無かった。この日から朝の満員電車と帰りの帰宅ラッシュ時の電車は、全て戦争と同じと悟った。

十二時間労働と聞くと、九時から二十一時と予想する。しかし、片道一時間の通勤時間も仕事と同じ戦場だ。すると八時から二十二時の労働と大差ない。十四時間労働が当たり前となると、通勤を合わされば十六時間労働と同義語だ。自分の時間はない。趣味に費やす時間は贅沢な嗜好品。でも六日の労働を一日の休みで回復させる事は、どう考えても無理だった。

歩き回る仕事では、革靴がカカトに突き刺さり、化膿した靴擦れを生んだ。足の裏には、既に化膿した、マメが数個出来ていた。歩く度に、革靴が化膿した場所をえぐり、足を通り越し、全身を激痛が包んだ。だけど労働は足を休ませてはくれなかった。新しく買った新品の靴は、二ヶ月目には底がすり減り、少しの水たまりの上を歩いただけで、靴下を濡らした。

電話番だった当時、すぐに電話に出られなかった事で、頭を叩かれた。すぐに出なければいけないと、動物と同じ様なしつけの仕方、僕は学んだ。次に電話に出た時は、お客さんの情報を聞き出せなかった事で、頭を叩かれた。「電話一本もらうのに、どれだけ広告費を掛けてると思ってるんだ」「その電話をお前は無駄にしたんだ」「広告費を返せ」そうなのしられた。

どうやら電話に出たとしても、給料泥棒のような存在らしい。会社のシステムを理解していない、新人の僕が一番悪い。教えてもらう事は、甘えで、見て覚えるのが社会の通例だと言う。その日から、電話が鳴るたび、手に汗が止まらなかった。電話に出る事が怖くて仕方なくなった。

それでも労働は続く。走る事を辞めさせてはくれない。

またあるとき、営業だった僕は、お客さんの役に少しでも立ちたい。そう思って一人のおばあちゃんに対して、真剣に相談に乗っていた。二時間ほど時間をかけ、おばあちゃんの役に立てればと話を聞き込んでいると、途中で上司にバックヤードへ来る様に呼ばれた。

「お前ふざけてんのか？」一瞬何を言っているのか分からなかった。「時間をかけずに適当に売り込め。」「じゃなきゃ時間の無駄だ。」「買わない奴はお客じゃない。」「お客に時間をかけないで、お前はババアに時間を使っているだけだ。」そう言う理屈だった。



時間をかけ、誠心誠意寄り添う事は行けない事らしい。誰かの為に、何かをしてあげたい。そんな思いは社会人にとって意味の無い事なんだろうか。せめてこんな僕にも出来る何かがある。それは全て甘えだった。

## 命を削る事が労働だと悟った

「十七時に仕事が終わる人生ってどんなんなんだろうね」「多分、今十七時に終わっても、何をやれば良いのか分かんないよ」一緒に働いていて、ただ唯一良くしてくれた上司がポロツと言いつ放った。僕よりも十年以上早く、労働と言う荒波に食らいついた人は、そうこぼした。

一日の休みは平日だった。だからその上司は、子供の運動会など行った事は無かった。サッカーをやっている子供の応援に駆けつける事は、夜と朝がひっくり返るほどの出来事だ。二十一時に仕事が終わる、帰るのは二十二時を超える。小学生の子供は、既に寝てしまっていて、顔すら合わせられないらしい。

「一週間は子供と話してないなあ」「俺の顔すら忘れちゃってるんじゃないかな？」そう上司は小さい声で寂しそうにつぶやいていた。一度で良いから、土日に休んで、学校が休みの子供と奥さんとどこか遠くへ旅行する事が、夢だと言っていた。

僕も両親が働き詰めの家だったから、両親とどこかへ旅行に行った記憶は無い。確かに小さい頃は、どこか遠くへ家族と行けた

ら、それほど楽しい思い出は無いと思う。だけど、行けなかったとしても、家族を大切に思う事に変わりはない。年を取れば取るほど、親の事情には敏感になるのが子供だ。小さい頃は確かに寂しくも有ったが、それでも僕たち子供の為に働いてくれる親には感謝しか無い。そんな事を上司に伝えると、涙ぐみながら、「俺の子供もそう思ってくれるかなあ？」「親らしい事は何もしてやれてないよ」そうつぶやいた。

その上司は立派だった。家族を思う素晴らしいお父さんだ。しかし、その親孝行ならぬ、「子供孝行」を労働環境が全て奪って行った。

小さい頃の夢と言えば、宇宙に行きたい。ケーキ屋さんでお腹いっぱい食べたい。サッカー選手になりたい。そんな輝かしい物を夢と呼ぶのだろう。しかし、労働地獄の中に監禁された状態の上司からすれば、旅行と言うごくごく小さいな幸せも、宇宙に行く事と同じぐらいの夢なのだろう。

夢を持つ事も、自分の時間を持つ事も全てが悪。生きる為に働くのではなく、働く為に生きている。それが社会のルールであり、大人になると言う事。命を削るのが労働なんだと悟った。

自分の体を蝕む、寄生虫のような物を体内に入れ、体や精神を食わせてぼろぼろにする事が、お金をもらう唯一の方法だ。だから働いている人で、楽しそうに働いている人を僕は見た事が無い。多くのサラリーマンは同じ様に、死んだ魚の目をしながら、会社へと向かって行く。会社と家との往復。人生の全てはそれの繰り返し。それが今後三十年、四十年と続いて行く。そ

して働けなくなった物は、粗大ゴミかのように捨て、他の代替品を集める。会社にとって、取り替え可能な部品なのだ。誰でも良い。唯一会社側の条件が有るとすれば「文句を言わない」これだけが労働への採用条件だ。

## 人生を変えた売れ残りのパソコン

### 普段行かない二階のフロアで

「かあちゃんたちは大丈夫だから。自分の好きな事をやってね。」

がちりしていた体系がやせこけ、いつしか猫背になり、活発だった少年が労働と言う社会に揉まれ、弱々しくなっていくのを見ていられなかったのだろう。

あるとき仕事から帰って来て、スーツを脱ぐ僕の背中越しにさらっと言われた。僕は小さな家族すら守る事が出来ない、マントの破れたヒーローもどきだ。良い歳に成っても両親に心配された。その事に、自分の非力さを嘆いたが、でも、もう僕には本当にやりたい事。自分の好きな事。それが既に分からなかった。それらを見る事さえ罪な事だと思った。

「うん。ありがとう。」諦めとも取れる小さな声が、自分のその先の人生を暗示していた。しかし、次の日自分でも驚いたが、夜中までやっている本屋に足が向いていた。自分の人生を諦めたく無い。それが本心だったのか。この気持ちの本屋に足を運

んだんだろうか。定かではない気持ちではあったが、この出来事が後の人生を大きく変えた。

自動ドアが開くと、目の前には読み切れない量の本がズラッと並んでいた。それまで本など読んだ事は無く、活字は僕の苦手分野だ。昔、タウンページぐらいある分厚い本を買ってもらったが十ページすら読めなかったのが僕だ。

一階と二階に広がる本屋。普段は一階にしか足を運んだ事は無かった。なぜなら漫画が並んでいるのが一階だからだ。漫画に引き寄せられる誘惑を避け、足を運んだ事の無い二階へと向かった。ベストセラー小説、本屋賞受賞作品、豪華に作られ量産された本が並んでいる棚をかき分け、何かヒントになる事を探す。「月百万円稼いだ思考法」「寝ていても月三十万円」行き止まりの奥の棚にはそんな怪しい本が並んでいた。そんな物は夢物語。あくせく働いて僕の給料は十六万円だ。

しかし、その棚の横にある本に、僕は不思議と目を取られていた。その本には、副業で稼ぐ方法が記されていた。どうやらサラリーマンの副業からでもネットを使えば稼ぐ事が出来るらしい。今思い返せば、時代遅れの古いノウハウだったが、その時初めてせどりという言葉を知った。せどりとは、転売という言葉が、ネット用語として広がった言葉で、転売とほとんど意味は同じ。

それまではインターネットで物を売るとなると、個人ではなかなか売ることが出来なかったのだが、ネットショップ最大手のアマゾンが個人にも取引出来る様にサービスを開始した事でせ

どりが普及したらしい。またアマゾン側が相場を見極めるグラフなどのサービスを提供している。個人の副業に取り組む為のプラットフォームが出そろっていたのだ。ネットショップ最大手のアマゾンが、「個人でどんどん売って流通を加速させよう」そう言って、購買を促している。そのようにせどりでは、アマゾンが見方についてくれるらしい。本にはそう書いてあった。

やりたい事は無い。ただど一つだけ贅沢を言っているのなら、このしがらみだらけの生活から解放されるのが、唯一贅沢な夢かもしれない。その日の夜にアマゾンの出品者用アカウントを設立した。それまで自分のパソコンを持った事は無かった。家には一つだけ家族兼用のパソコンがあった。潰れた美容院を営んでいた時に、使っていた一つのノートパソコン。このノートパソコンは借金返済の為に売る必要は無く、家にほこりを被って眠っていた。

苦手意識のあるパソコンで、ワード、Excel、パワーポイントなどは何一つ分からなかったが、登録画面に沿って入力するだけなので、何も問題なくアマゾンのアカウントを取得出来た。これでアマゾンにて売る事が出来る窓口を持てた。後は売る商品を買ってくるだけだ。しかし、それまで会社に雇われ、会社から給料をもらう以外に、お金を稼ぐ方法を知らなかった。数十万円と稼げるとも思っていない。これで独立するなんて気持ちも無い。それでも月に五万円ぐらい稼げれば、多少なり生活は楽になる。それぐらいの気概だった。

アマゾンでは本、CD、DVD、家電、家具、色んな物が取引されている。つまり個人であっても、諸々の商品を売る事が出

来るらしい。次の日の仕事の帰り道。古本屋に寄ってみた。アマゾンで売る商品を見つける為だ。上手い話には裏がある。そんなネガティブな感情が根付いていた。会社に面接する時、残業無し、アットホームな職場、高給も可能などと、書かれている内容と相談し就職を希望する。しかし就職情報雑誌にある通り、残業が無く、アットホームな職場と書かれている内容で、内容通りの会社に出会った事が無い。そんなうたい文句には慣れていた。

## 価値観の崩壊

古本屋と言えど、アマゾンで売る為に買いに行った事は無い。僕が本屋で買うのは漫画以外無かった。お店に入ってみると目の前に広がる膨大な量の本に圧倒された。

それでもタイトルや商品名を携帯で、打ち込んで、アマゾン上での値段を見る。お店で売っている値段よりも、アマゾンの方が高ければ、差額を儲ける事が出来る。せどりはそれだけの理論。一点、二点と検索したが、どれもアマゾンでは1円。店舗では100円と、店舗の方が高い。これで買って来ても100円が1円で売れるだけで、赤字だ。

「やっぱり騙されているんだろうか」そう思い掛けた瞬間、三点目に検索した商品が「780円」という値段を表示した。「ん？検索ミスか」そう思ったが、何度検索してもアマゾンでは780

円だった。そして店舗で売っている値段は100円だった。古本屋では100円だがアマゾンでは780円。

微々たる物かもしれないが、本当にあった。信じられない気持ちと、高揚する気持ちで、興奮が抑えられなかった。握る携帯も、手に汗が滲んでいる。なんだか落ち着かなくなっていて、辺りをキョロキョロ見渡した。しかし閉店間際で、誰もいない店内が広がっているだけ。どうやら高揚しているのは僕だけのようだ。

その後閉店まで検索してみると、1700円。2500円。とアマゾン上の方が高く売れる商品を3点ほど見つける事が出来た。全ては100円で買って来たものだった。仮に売れなくっても300円の損するだけ。そう考えると気が楽だった。家に商品を持ち帰り、慣れない手つきで、早速アマゾンに出品する事にした。

出品を終えても、本当にあのネットショップ最大手のアマゾンに出品出来ているのか実感が湧かなかった。だから、出品が終えてから少し待ち、出品した商品のページへログインしてみた。すると「新規出品者」という形で、自分が登録したショップが反映されている。日本全国に僕が仕入れた商品が売りに出されているのだ。それだけで感動だった。

そして数日後。僕の携帯に慣れないメールアドレスからメールが届いた。宛名はアマゾン。「何か問題でも起こしたんだろうか」そんな一物の不安を抱いた。しかし不安をよそに、メールを確認すると、驚きの文面がそこにはあった。

「注文確定-商品を出荷して下さい」見慣れないアマゾンからのメールには、そう書いてあった。100円で買って来た商品が売れたのだ。価格を見ていると2500円と記されていた。100円が2500円になったのだ。メールを見た時は放心状態で、何がなんだか分からなかった。その証拠に、僕は直ぐにメールを閉じた。しかし時間が経つに連れて、徐々に実感が沸き、嬉しさが底抜けに溢れて来た。

たった2400円だったけど自分一人、個人で稼ぐ事が出来てしまった。ただ、焦るのはまだ早い。しっかりと購入してくれた人に商品を発送しなければ行けない。郵便や宅配便を使った事がほとんどないため、どうやったら遠くの人へ送れるのか分からなかった。その日の帰りに、百均へ行って、商品を送る為に必要な梱包資材を買った。梱包資材と言っても、衝撃を緩和するぷちぷちと、封筒それだけだ。ネットで調べた事を見よう見まねで、発送する商品丁寧に包んで、購入者へ感謝の思いを込めた。そしてポストに投函した後、やっと「稼げたんだ」と言う実感が湧いた。当然アマゾンの出品者用アカウントには、2500円の数字が並んだ。

## せどりの快進撃

そこからは、仕事帰りにお店に行って検索する事が毎日の習慣になった。どんなにクタクタに疲れ、満員電車の中で揉まれ、立ちながら寝るぐらいの疲労度であっても、お店に行く事が楽



しくて仕方なかった。会社では「使えない」と言うレッテルを貼られ、存在意義を感じれなくても、僕が買って来た商品をアマゾンを通して全国の人が欲しがってくれている。そう思うと、自然と活力が湧いた。また、リサーチすればするほど、ネットで儲かる商品が見つかる。子供がクリスマスプレゼントにおもちゃをもらった様に、楽しい遊びが出来た。そんな感覚だ。

お店にはアマゾンで高く売れる商品ばかりではないが、その分アマゾンにて高値で売れる商品を見つけられた時の喜びは、ひとしおだった。アメリカ西海岸では、金塊が山で見つかり、皆がお宝を掘りに行った時代があるらしいが、その時のアメリカ人と同じ感覚だろうか。店舗へと足を運ぶに連れて、商品の種類もよくわかって来た。ネットで高く売れる特徴のある商品。逆にアマゾンでは安く、あまり高く売れない商品。見慣れてくるごとに効率がどんどん良くなる。

会社から帰り、地元の駅に着くのが二十二時頃だったが、お店が閉店する二十三時までリサーチをした。会社との副業なので、当然睡眠時間は少なくなる。しかし、不思議だったのは全く苦と感じなかった事だ。

せどりは仕事と趣味との中間。仕事している感覚はなく、高く売れるものが見つかればそれだけで高揚する。また注文確定メールが届くと更に胸が高鳴る。しかもそれが、お金に繋がる。一言で言うなれば、ただ楽しかった。だから、睡眠時間が一時間削れようが、全く苦しいと言う感覚はなかった。

「せどりで売れるんだ」そんな自身がつき始めた時には、100円だけの買値ではなく、もう少し値段を上げた。きちんと売れる商品だけを見極めれば、アマゾンでは売ってくれるので、多少なりとも仕入れ値が高くても構わない。買値の幅を広げた事が、功を奏した。

280円の商品が3580円で売れた。

500円の商品が3980円で売れた。

750円の商品が5980円で売れたりもした。

徐々にアマゾンからの注文確定メールが頻繁に届く様になり、毎日の様に売れて行ってくれた。またせどりで自分で稼ぐと言う事は、別の恩恵を与えてくれた。会社でこきを使われ、疲労困憊していたとしても、別の収入源、別の居場所が僕にはある。そんな存在が心強かった。だから上司からのプレッシャー、威圧、暴言、それら全てをキレイに受け流す事が出来た。心に余裕が出来たのだ。今までは会社に依存する事が、僕の生きる道。人生の全て。だからこそ、その会社で否定される事はある意味、死を意味していた。でも今は違う。

保険とは安心を買う物だ。家族の大黒柱が死んだ時に家族は路頭に迷う。そうならない為に、生命保険に加入する。車を買う時には、誰かを弾いて殺してしまうかもしれない。車とは鉄のかたまりだからだ。そうならない為に、自賠責保険に加入する。家を買う時は、火災保険に加入する。人生最大の買い物である家が、火事で全焼すれば残るは何千万円と言う借金だけになるからだ。月々数万円を払ってでも、安心を欲するのが人間

だが、会社に居る上での保険は社会保障等ではないと、このとき悟った。

会社に依存しなくても、生きて行けるんだ。これが会社員に取っての本当の保険だった。上司に無理難題を付けられても、頭ごなしに引き受ける事無く、軸を持って否定出来た。理不尽な暴言を言われても、意を返さなくなった。気にならなくなった。僕に取っての希望は別の場所にあるから。

せどりでの目標が出来ると、日々の生活がより豊かに見えた。満員電車では、これから過ぎて行く、絶望を考える時間だったが、どうやったらせどりでもっと稼げるだろう。そう考える事で、未来がより楽しくなった。仕事も嫌だったら、辞めてやる。そんな根拠の無い意固地が、流されやすい自分を食い止め、会社員としての生活を楽しめた。

やりたい事があると、見える景色が変わる。希望を考える事こそが悪だと思っていたが、目標を達成する事が善だと思える様になった。会社員の僕に取って、会社の仕事をやってる事自体に、何ら変わりなかったが、全てが変わった様に見えた。もっともっとせどりで稼ぐ為にどうしたら良いんだろう。そこからどんどん情報を仕入れて行った。時には情報には数万円と投資した。知っている事と知らないことでは、この情報化社会では数十万以上の差を出す事を身を持って体験していたからだった。いつも行っている店舗と別の店舗に行こう。そう考え、いつ下りる最寄りの駅の一步手前の店舗によって帰る事もした。

仕入れるお店の幅や、仕入れる商品のジャンル。これらを増やすごとに、より多くの商品を仕入れる事が出来た。当然仕入れる商品数が増える事で、アマゾンからの注文確定メールは増える。注文確定メールが増えれば、どんどん利益が増える。正のスパイラルだった。

当然、ちょっとした失敗はおかした。成功に失敗はつきものだ。せどりで稼げる様に、ジャンルを広げようと、家電製品も仕入れようとした。ヘアアイロンや電子レンジ、ゲーム機本体、これらの商品類だ。しかし、会社員として少ない給料で買っている為、仕入れ資金が足りなくなる。家電製品は一つ仕入れるのに一万円以上はかかる。一つの仕入れ値が圧倒的に高い。しかも一万円で仕入れたとしても、家電製品は利益率と呼ばれる数字が低い。利益率が低ければ、一つあたりに取れる利益が低くなる。つまり家電製品は多くの資金が必要で、転売業界で言う薄利多売に陥る。強者の戦略と言われる戦略だ。

また、会社との副業なので、会社の帰り道に仕入れる事になる。家電製品は、一つあたりの荷物の大きさが大きい。当然と言えば当然だが。すると、バーゲンセール時かの様に、両手に荷物を大量に抱えて家に帰らなければ行けない。また、売れるまでは家においておかなければ行けないので、大きな家電製品を置くスペースは、広く無い僕の部屋には無かった。会社からの帰り道に大きな荷物を持ち帰る事は、僕のスタイルには合わなかった。これは失敗だった。

ここから仕入れるジャンルを改めた。仕事帰りにも、カバンに入れられるぐらいにコンパクトな商品。そして家に持ち帰って

も、邪魔にならないぐらいの商品サイズである事が望ましい。また利益率も高い商品の方が、手元に残る金額が大きい。例えば同じ5000円で売れる商品であっても、4000円で買って来たのか、1000円で買って来たのか。これによって、利益率は大きく異なる。当然安く買って来て、高く売れた方が利益は大きい。

どうにかして利益率を高めるにはどうしたら良いのか。そう考えた末、自分にはコンパクトに仕入れられるジャンルがピッタリだと言う事に気がついた。また、仕入れる店舗に関して、仕入れやすい店舗と仕入れにくい店舗がある事に気がついた。仕入れにくい店舗には足を運ぶ事を辞め、仕入れやすい店舗へと足を運ぶ様にした。

そうして絞る所は絞り、広げる所は広げた。すると面白い様に仕入れが出来る様になった。1000円で10000円に売れる商品を見つけられたり、300円が5600円に変わる商品を見つけた事もあった。どんどんせどりにのめり込み、自分でスモールビジネスをやる楽しさに、気がつき始めていた二ヶ月目、何とせどりの収入が23万円を超えた。

当時サラリーマンで9時から21時の12時間働いて、給料は20万円行かなかった。日本での労働基準法で、八時間勤務と言う事が明記されているらしいが、僕の会社には関係のない事だった。残業のほとんどがサービス残業で、給料には反映されない。しかし、自分でビジネスを行なう事は、全て自分に反映される。稼げたお金は全て自分の物。使った時間は全て自分に帰ってくる。

副業で始めたせどりで収入が、会社からの給料を、二ヶ月で超えてしまった。何の為に会社に対して時間を投じているのかわからなくなった。ビギナーズラックだと言う気持ちもあったが、三ヶ月目、四ヶ月目と収入は上がって行った。六ヶ月目には月の給料が30万円を超えた。この金額はサラリーマンでの給料の約二倍ぐらいの金額だった。もしかしたら、振込まれないんじゃないか。そんな不安を抱いたが、登録していた銀行口座へと入金期日きっちりに振込まれていた。

## 自由の定義

### プレゼントをもらうなら

ついに副業での給料が、会社からの給料を超えてしまった。これはつまり会社に依存する事無く、自分の生きる道を自分で選べる事を示していた。僕は「かあちゃんたちは大丈夫だから。自分の好きな事をやってね。」ふとある時、かあちゃんに言われた、この言葉を思い返していた。

自分の好きな事って何だろう。自分のやりたい事って何だろう。自分の趣味って何だろう。何をやっている時が僕は一番楽しいんだろう。しかしこう考えたこの時は、以前とは心持ちが全然違う。労働につかれ、疲弊した顔で言われた時とは、全く違う感情で考えられた。

僕はクリスマスと誕生日が近かった。その為、小さい頃はクリスマスプレゼントと誕生日プレゼントが一緒だった。クリスマスプレゼントと言う存在を知ったのも、クラスがクリスマスプレゼントで盛り上がっていたから知れた事実だ。その年齢も小学三年生の時初めて知って、そんな物があるのかと驚いた。親にクリスマスプレゼントが欲しいと訴えても、「家にはサンタさんはこないから」。この一言で、僕の希望は打ち砕かれた。

もらえないクリスマスプレゼントの中で、もしプレゼントがもらえるなら何が欲しいだろうか。こう考えるのが、小さい時の僕。でも今は違う。本当にもらえるかもしれないプレゼント。それなら、「何が欲しいのだろう」。そう考える事は、もしもを考えるより、具体的で明確で楽しすぎる幸せな時間だ。

クルーザーでパーティーする事に興味は無い。高級フレンチ料理は好きじゃない。皿に見合わない少量の肉を食べるより、丼物をかっ食らうのが好物だ。自家用ヘリを使い、遠くへそばを食べに行きたい欲求も無い。高級車を五台も六台も持ち、眺めたいと言う欲求も無い。ただ単に、自分の好きな事を好きな時にやれば、それだけで世界一の幸せ者だと言える。

昼過ぎに起きて、ゆったりとした午後を過ごせるだけで十分。満員電車に乗らずに、ゆっくりと散歩出来る時間があれば十分。カフェで存分に読書を楽しむ事だけで十分。好きなサッカーに打ち込める時間があれば十分。

貧乏性だからだろうか。お金を使う事に対して楽しみを持ってない。そんな事ではなく、お金を使わずに頭を使って遊ぶ遊びの方が楽しいし、一人で高級な銀座の寿司を食べるより、仲間と回転寿司をわいわい言いながら食べた方が幸せだ。だから僕は会社を辞めた。あの悪夢だった会社を辞める事が出来た。

会社を辞める事が出来るのは、ニートか実家がお金持ちの、運のある人間のみには許された事だと思っていた。そういう意味で言えば、親がお店を潰し、自己破産した僕は、運のない人間だ。しかし現実はそのようではなかった。会社以上に、お金を稼げる事が出来れば、会社に無理に依存する必要は無いということを知った。

ニートになれば、雇われないという、その夢は叶うかもしれないが、お金を持っていないニートには自由は無い。会社以外の場所で、会社以上のお金を稼げているのであれば、自分の人生を好きにデザインする事が出来る訳だから。

確かに会社を辞めて、決まった日時に給料が入らない生活を捨てるという不安はあった。しかし、会社としてあくせく働き自分の時間もない、好きな趣味も見つけれない。そんな生活を今後30年、40年と続けて行く事の方が、よっぽど不安だった。

仮に10万円もらえて、好きな事に没頭出来る人生と、月に30万円もらえるが、好きでもない事を永遠する人生があるなら、僕は迷わず前者を選ぶ。前者の人生の方が遥かに楽しい上、人



生は一度しかないのだから。しかし僕の生活は両方を満たしてしまった。

## 突然振り込まれた71万円

会社を辞めてから時間が増えた。働く時間は自由に決められるようになった。せどりはほとんど効率的に作業することができていたので、空いた時間で何か新しく始めようと思い立った。その頃はまだ自由な人は周りに少なかったし、時間を持て余していた。友人たちも普通の社会人なので、あまり時間が合わなかったのも原因だった。

そんな動機でネットサーフィンを続けていると、ブログで稼いでる人のとある記事を見つけた。「ブログって芸能人がするものじゃないの？」はたまた「学生が友達同士で日記を更新するものじゃないの？」僕はそう思った。でも、どうやらその人はブログの記事を書くだけで、ほとんど働かずに月100万円以上を稼いでいるらしい。

僕は「これだ。」と思った。僕はそこからブログで稼ぐことにのめり込んだ。ブログと聞くと、芸能人などのブログを想像する人が多い。でも、どうやら芸能人のような単なる日記じゃダメらしい。

僕のような一般人で何にも取り柄がない人の日記ブログを誰も知りたいなんて思わない。そんな日記ではなく、「誰かの役に立つ情報」を伝えるブログ。それこそがブログで稼ぐための大前提であり、僕の知っているブログという概念とは違うことを知った。

例えば、綺麗になりたい女性が「ダイエットの方法」を調べると「痩せる方法」が記された色々な検索結果が出る訳だが、それがいわゆる「ブログ」だ。

役に立つ記事を書けば、それが検索上位に上がり、何をせずとも自動的にアクセスを呼び込む資産となる。日記的なブログではなく、オウンドメディアという呼び方もあるぐらい、ブログというものの価値は増殖していて企業さえも自社ブログで集客しているようだった。

僕は何を伝えられるだろう。そう考えた時に思い浮かんだのは「今まで活動してきたせどりの経験」だった。僕と同じようにサラリーマンとして苦しんできた人は多くいるだろう。そして、せどりに取り組んできて、あまりうまくいかない人もいるだろう。そんな人に向けて役に立つ情報を伝えるブログを運営しよう。そう思い始めた。そしてこれが後に衝撃の出来事につながった。

そこからせどりとブログとの両輪で作業をするようになった。もちろんわからないことだらけ。だからこそ教材を買ったり投

資をしたりして勉強を重ねた。「知識の重要性」というのは、せどりに取り組んできて嫌なほど知っていたからだった。

ここで、アクセスが集まったところで何がお金に変わるのか。そう思っている方も多いと思う。役に立つ記事を書き、検索上位に上がってくれば、アクセスが集まることは分かる。しかし、アクセスがあったところで、どうやってお金に変わるんだろう。と。

ブログではアクセスが集まって来た時、1つの商品紹介記事を作る。その商品がブログ記事から売れてくれれば紹介料が振り込まれる仕組みだ。健康ブログなら健康サプリ、美容ブログなら化粧品など。そして、それらの商品は個人でも、ありとあらゆる商品を今は紹介できるようになっている。1つの商品紹介記事を作り、あとはアクセスしてきたユーザーが、自動で商品紹介記事に訪れて買って行ってくれる。

そして、作り上げたこのブログは24時間僕が寝ている間も、ずっとオープンし、営業していてくれる「オンラインショップ」となり、集客と販売を司ってくれている。

だから、1つの商品紹介記事を書いたあとは、アクセスを集めるために「役に立つ記事」を書くことに専念すれば、自動的に売れて行ってくれるようになる。このブログの仕組みの中に、「仕入れる」という作業や「発送」という作業はなく、ブログを作れば作るほど楽になっていく仕組みがそこにはあった。

もちろん最初は、誰も僕のブログなんかは見向きもしてくれないので、ひたすら作業していた。疲れ切った時は近くに流れてる川に行き、黄昏たりもした。その時をきっかけに「夜中にいく散歩」は今でも僕の趣味の一つになった。

ドンドンと記事を書き続け、やがて僕のブログへ訪れてくれる人は、10人、100人、500人とドンドンと増えて行った。僕のブログへ訪れてくれる人が増えれば増えるほど、僕の収入は必然と上がって行った。そしてある時、収入は71万円を超えていた……

「単なる一般人でもブログで稼げるんだ」 そう思った瞬間だった。

僕は嬉しかった。それは71万円という金額を稼げたということではなく、作業すればするほど楽になっていくことに関してだ。せどりはせどりで楽しかった。それは自分一人でも誰かに雇われずに「個人で稼げる」ということを体験できたからだ。でも、せどりの場合、実労働がどうしても必要になる。だからこそ稼ぎやすいジャンルなのだが。

でもブログの場合は、自分の代わりにブログが働いてくれる。アクセスが集まれば集まるほど稼げるようになる上、その分労力はどんどん減っていく。それがせどりとの違いだった。

これは後に気づいたことだが、全てのビジネスは「集客」と「販売」によって行われる。「人を集めて、商品を売る」これがビジネスの全てだ。そしてこれらの活動のために、企業はcmを流し人を集めたり、商品開発をして、プロモーションしたりする。

でも僕の場合は、ブログが「集客」と「販売」の全てを僕の代わりに行ってくれている。だからこそ、ブログが完成した後は僕自身が作業する必要性は特にはない。ブログが人を集め、ブログが商品を提案してくれるからだ。僕のやることといえば、毎日来る報酬メールを確認するだけ。1～2時間メンテナンスをしたら後は特にやることはない。全ては自分の自由だった。

## 兄からの不吉な着信

全ては僕の自由だった。そんなことを経験したある出来事が起こった。その時僕は行きつけのカフェで、パソコンにて1時間ほど作業をし、趣味の読書をしていた。そんな時、僕の携帯が鳴った。着信は兄貴からだった。僕は息を飲んだ。

兄貴から連絡が来るなんて滅多になかった。仲は決して悪くはない。だけど家族同士頻繁には連絡は取り合わないものだ。だ

からこそ、兄貴から来た着信は「不吉の知らせ」だと直感した。

「もしもし？どうしたの？」そう僕が電話に出て答えると、その嫌な直感は当たっていた。「助けてほしい」兄貴から第一声にそう言われた。

助けてほしい？何があった？まさか事故でもしたのか？もしくはトラブルに巻き込まれたのか？そんな不安が色々よぎった。僕が不安で頭をいっぱいにさせていると、兄貴はこう続けた。

「広島まで旅行に来ただけど、こっちで免許が停止してることに気づいたんだ」「だから運転することができないから迎えに来てほしい」そう兄貴は続けた。

僕はその言葉を聞いた瞬間爆笑してしまった。「なんだ。事故ったわけでもなく、トラブルに巻き込まれたわけでもなく、ただ単に免許の更新を忘れてただけか」と。色々な不安を巡らせたが、その不安はどれも見当違いで、安堵の気持ちから笑けて来てしまったのだ。

「何笑ってんだよ！」という兄貴の喝に、自分を取り戻した後、「どうしたらいいの？」と続けた。すると、「免許が切れてる状態だから、俺は運転できない。だから新幹線でこっちまで来て、俺と車の両方を拾って送ってほしい」と言われた。

僕は2つ返事で「わかった。待ってて。」と返し、1時間後には広島行きの新幹線に乗っていた。

もし仮に、僕がサラリーマンだった時。仕事を抜け出すことができただろうか。いやできなかった。「免許が切れたただけだろ。自力で帰って来させろ」そう言われて見捨てられるのがオチだっただろう。いや。兄貴からの着信に出ることさえできなかったかもしれない。当時僕の上司で、出産にさえ立ち会えなかった上司もいるぐらいだから、「立ち往生した兄弟ぐらい捨てる」と言われるのが関の山だろう。

起きた出来事としては、大したことなかったかもしれない。ただ広島に取り残されて帰れなくなっただけの話だ。だけど僕は唯一の兄弟を救うことができた。家族を救うことに「時間」を投じることができた。それが何より嬉しかったのだ。それは僕がサラリーマンではなく、自由だったからできたのだった。

新幹線で広島まで向かえに行き、「次いでだから」という理由で、一泊し広島を観光した。夜の原爆ドームの迫力に驚いた。広島のお好み焼きのうまさに感動した。平和記念碑の前で中学生達が「もう2度と過ちを起こしません」といった誓いの言葉に胸がグッと来た。

サラリーマンの時は家族の時間をほとんど取れずにいたが、兄弟二人で心置きなく、時間を共にした。

## 旅行をしながら152万

また僕は、ある時岩手県に行った。特段岩手に予定があるわけじゃなかったが、世界遺産の平泉を見に行きたかったからだ。この趣味が後々僕の生きる道となっていくことは後述するが、なんとく親父が生まれた場所でもあった岩手県に行こうと思いついたのだった。

世界遺産の平泉では神社が所狭しと混在していて、どこの誰かが言っていたが「お寺のディズニーランド」とはまさしくだった。日本三大鍾乳洞でもある龍泉洞にも行った。

夏場だったのに、ひんやりと肌寒く、真っ暗な洞窟内は水の流れる音が爆音でこだまし、恐ろしく感じた。また洞窟内は狭く暗い。自然にできた迷路を進んでいるような感覚。時には洞窟内を20mほど上に登り、上から鍾乳洞を眺めたが足が震えた。そう。僕は閉所恐怖症、高所恐怖症、暗所恐怖症とのトリプルパンチだということをこの時知り、一目散に洞窟から出た。

その後、岩手では有名な盛岡冷麺を食べた。岩手では焼肉屋に冷麺を食べに行くことが当たり前のようで、「焼肉屋で冷麺だけ食べて帰っていいの？」と疑問に思ったが、それが岩手では普通らしい。



ホテルに帰ってからも、一応仕事するかな？とパソコンを持参していたが、旅の疲れからかパソコンはほとんど開かず、結局旅行中は仕事らしい仕事はしなかった。

最初はどこかでサラリーマン脳が抜けきらず、「働かなければ収入は0円になる」と不安に襲われたりしたが、そんな不安とは裏腹に収入は下がることなく、むしろ上がって行って、この旅行から帰って来て2～3のブログ記事を書いただけだったが、その月の収入は152万円を記録していた。

## 見つけた夢

ブログとは、木を育てるのに似ている。最初はお弱くて僕らが水をあげたり世話をしあげないと育たない。でも世話をしあげながら育てていくと、やがて根は地中深くに伸び、自らで栄養を蓄え始める。そして自然とドンドンと大きくなり、僕らが世話をしなくても大きく育っていく。まさしくブログと同じだ。

せどりでは誰にも雇われずに、一人で生きる力を学んだ。ブログではより自由に生きるために、もう一人の自分を作ることを学んだ。会社に雇われないことが自由だと思っていた。けれど雇われない上で働かなくても自分の代わりに稼いでくれる仕組みを持つことが本当に自由になることだと悟った。

時間に余裕ができた時。「将来何をしたいだろう」そう考えることが増えた。

身体も心も小さい幼少期。純粹に「色々な世界を見て回りたい」そう思っていた頃があった。でも、大人になって行く度に、現実を突きつけられて、「我慢する事が大人だから」そんな言葉を聞きすぎて、あの頃抱いていた、「色々な世界を見て回りたい」という夢は、いつしか忘れ去られていた。

僕はひたすらに「お小遣い程度でも稼げれば」という時から「雇われずに済むならこの道で頑張りたい」と進んで来た。でも、本当にやりたいことってよくわからなかった。それは「我慢することが大人だから」と言われ続けて抑制されていたからだった。

そして時間を余すようになった時、「本当に自分のやりたいこと」を真剣に考えるようになった。そして1つの答えにたどり着いた。

時間が有り余り、色々と「何をしたいのか」と考えていくうちに、「小さい頃の自分の夢を、今の自分が叶えてあげたい。」そう思った。小さい頃の自分の夢というのは、純粹に「色々な世界を見て回りたい」と願ったその夢だ。

大きな歴史の中で、たかだか百数十前は江戸時代。この江戸時代では、日本という同じ国でさえ、自由に行き来することはできなかった。藩の許可なしで出てしまえば、それは脱藩となり、家族親戚まで打ち首になってしまう。ましてや国外に出ようものなら「ハラキリ」を迫られた時代がこの日本にはあった。

でも今は、日本は元より世界にだって、行こうと思えばどこへでも行ける。あの幕末時代の人たちが、「死んでもいいから行きたい」と思った日本中どこへだって行けるわけだ。この狭い場所で一生を終えるんじゃなくって、幕末の人たちが命を捨てても行きたいと望んだ場所に行こう。そう思った。だから、今遅れて来た青春のように、夢を追いかける日々を送ろうと思った。

## あれから数年

夢だと思った夢物語から、僕は数年のときが経た。ライフスタイルは相変わらずで、夢を追いかけている。

広島原爆ドーム、厳島神社。京都の金閣寺。岩手の平泉。群馬の富岡製糸場。東京の国立西洋美術館。栃木の日光東照宮。山梨静岡の富士山。兵庫の姫路城。世界遺産という事だけでも、これ以上に訪れた。

その他にも、友人達と秩父や山梨へキャンプへ行ったり、長野や静岡、箱根に温泉旅行へ行ったり。一人旅も好きなので、小岩井農場や国立科学博物館、鎌倉など、遅れて来た青春かのようにいろんな土地を巡った。

親の夢を子供が叶える。これほどスゴイ事はないし、マンガでよく見るストーリーだ。でも僕は逆で、大人の僕が、子供の頃の僕の夢を叶える。そんな少し奇妙な図式になった。

サラリーマン時代では、自分の好きな時間、趣味に使う暇、休日、全てが会社の為だった。しかし、その生活からも数年の月日経ち、あの忌まわしき労働の日々を忘れかけている自分も居る。

人間は嫌な記憶を消す様に出来ているらしい。これは、脳の正常な機能の一つで生命維持装置の役割を果たしている。嫌な記憶でも、時間が経てば良い思い出に変わったり、記憶が薄れて行く事がある。移ろいで行く記憶のおかげで、自らの命を守り抜く為だ。電車に乗る事も無くなったので、東京都の満員電車、乗車率150%という異常な光景も、僕の記憶から無くなって来ている。

ある時は、熱海へ旅行に行っていた。太陽にカンカンに照らされた光が、反射する海辺を脇に道を滑走する。緩やかなカーブと共に、要塞の様な山が見えて来た。モーゼの神話に出てくる海を切り裂き二つに割った景色が、目の前に広がるかの様に、要塞の山の間にある道を進む。

到着場所は、熱海では有名な橋だった。高所恐怖症な僕は、恐る恐る友人と一緒に渡る。良い歳をこいてはしゃいで橋を渡る僕たちは、端から見ると異様な存在だった事だろう。そんな橋から見る海は、かき氷のブルーハワイのシロップの様に、真っ青な青だった。少しの勇気を出してでも橋は渡るものだ。そのおかげで、先にあった売店のソフトクリームは格別な味がした。

その後、お化け屋敷美術館、知る人ぞ知る海辺スポット、僕たちが勝手に名付けた、ながさわ山。（山がちびまる子ちゃんに出てくるながさわくんに形が似ているため）これらを見て回った。辺りが暗くなり、夕日が沈む様になった頃、僕らの目的が姿を現す。温泉だ。

ホテルに着いている温泉に駆け込むと、海岸付近にあるホテルからは、夕日と絶景のオーシャンビューが広がっていた。どこまでも進む地平線。上のオレンジ色と下の水色。コントラストが感動を呼び込む。疲れてもいない体にマッサージをするが如く、ストレスフリーな状態から更にリフレッシュを加える。最高なひとときだ。

熱海へ行ったのは平日だったので、人ごみや渋滞に苦しむ事は無かった。人も少なく、優雅に過ごせるひとときだ。友人も自分でビジネスをしている仲間なので、時間には余裕がある。サラリーマン時代では、そんな一日を過ごす事は考えられなかった。映画の中の話と、この日の出来事はイコールだった。しかし、雇われる事無く、自分でビジネスをやっているからこそ送る事が出来る日常だった。次の日。旅行が佳境を迎え、帰路についている車内。旅行中携帯を見る事はほとんどなかったが、ふとチェックしてみると、そこには20万円以上の売り上げを記すメールが届いていた。

ただこれ自体そこまで驚く事ではなく、そこまで気にしていない。お金は稼ぐことにさほど意味はなく、お金をどう使うのかが一番大切だ。僕は夢を追いかけるために使いたい。夢を追いかけるために人生を使いたい。そうやって僕は子供の頃の夢を今追い求めている。

これだけ感謝出来る様になったと言う事は、あの労働の日々にも少しは感謝しなければ行けないのかもしれない。あの労働から数年経ち、やっとそう思える様になった。

**拡大して行くネット社会の恩恵**

ネットが普及した今、僕のようなライフスタイルを送る人々が急増している。週末起業やノマドワーカーなんて言葉はその象徴だ。高度経済成長時には、終身雇用なんて言葉があたりまえだったが、逆に今では転職は当たり前と言う時代の流れにある。時代が変われば、当たりの定義は変わる。

もっと働く時間を増やし、月100万円以上を稼いでいる人も居る。主婦で月収100万円を稼ぐ人も知り合いで存在する。遥かレバレッジの効くネットの世界では、至極当然の話だ。しかも僕のように、会社とのすき間時間や終わった後の時間から始める副業からでも、ビジネスを始められるのがネットの良さだ。

ビジネスと聞くと、何か凄く大きな物を想像する人も居ると思う。しかし、主婦が趣味で作った手芸、洋服、アクセサリを売る。ブログを作り情報を発信する。欲しい人が居れば当然需要が生じる。需要があれば当然ビジネスとなる。ネットでは全世界、全国にアプローチ出来るので、欲しい人を捜すのはさほど難しい事ではない。なにせ日本だけでもネットユーザーは1億人以上いるのだから。

自分で作った物をネットで売る事と言う小さいな物でも立派なビジネスだし、会社との兼業なら副業と言える。そして自分で始めたビジネスが、会社からの給料を上回れば、会社にい続けるのか、辞めるのかはその人の自由だ。

今までの生活スタイルで良いのなら、そのまま辞めてしまっても構わない。会社に勤めながら、二倍分の給料を手元に残して

おく事も選べる。少し贅沢をしたいのなら、会社の2倍ぐらい副業から稼げる様になってから辞めてしまっても良いだろう。

要するに自由とは、自分に選択肢があるという状況だと僕は思う。会社に依存しているだけなら、会社から右と言われれば右を向くしか無い。しかし、会社に依存する事無く、貢献してあげていると言う立場なら、自分に選択肢がある。仮に会社の意向に添わず、辞める事になったとしても、その他から収入源があるわけだから、生活に困りはしない。辞めるも続けるも、自分が選べる。この選択肢が自分に有るか無いか、自由の定義だ。

そして人類の歴史を辿ってみると、ネットが普及して、まだ少ししか経っていない。これからどんどんネットが普及すると、オックスフォードの准教授が記した有名論文「未来の雇用」では記してある。まだまだチャンスはあるし、今後はもっともっと増えて行くと言う事の証拠だ。

現に僕が記した体験談やノウハウを電子書籍にした所、多くの人に共感してもらい、大手電子書籍サイトでトップ10に何度もランキング入りしている。5,6位等は数回受賞し、最高位2位まで獲得する事が出来た。これは多くの人に共感と感動を少しでも与えられた証拠だと思う。

**僕は小さくてもヒーローになれた**



全ては母から聞いた「お店を畳まなければ行けない」この一言から始まった。労働の地獄を味わった。名前も無くした。体重も痩せこけ、顔も別人と化した。劣悪な人間関係も経験した。僕は小さい頃に憧れたヒーローにはなれなかった。宇宙人と戦う正義の主人公。緑色やピンク色の敵と戦う、光り輝く誇り高きヒーロー。どれも漫画や映画だけの話だった。しかし「家族だけでも良いから守りたい」この小さな想いだけは届いた。

親父の誕生日、久しぶりに家族四人で焼き肉を食べに行った。自分で稼いだそのお金で四人の場を心底笑顔で過ごす事が出来た。かあちゃんの笑顔も昔と変わらぬ、可愛らしい綺麗な笑顔だった。親父も仕事を見つけ、店長と言う立場で日々働いている。週に一日の休みもあり、以前に比べれば、休めている方だ。かあちゃんも新しい職場で、最初は人間関係に苦しんで居たみたいだが、今は安定して楽しみながら働いている。今でも僕は時々、親に髪を切ってもらう。美容院に行くより、何でも注文出来るかあちゃんの方が切ってもらいやすいからだ。

最近になって、両親揃いお揃いでiPhoneに変えた。スマホは最初の設定が面倒で、50歳を超えた両親には、その設定が難解だ。渋々な返事をしたが、僕は内心微笑み手取り足取り教えてあげた。

それぞれの小さな出来事が「僕を家族の小さなヒーローに変えた」。そう、小さな頃に描いていた理想とは遠いが、ヒーローはヒーローだ。時々アラームのアイコンが無くなったと騒ぐが、

ただ隠れているだけの話だ。しかしそれだけで全て笑いに変わる。また以前の様な暖かい四人家族に戻る事が出来た。

これからも、そんなのほほんと人生を謳歌したい。そして夢を追っていきたい。自分の性分にあったこのライフスタイルで。友人達とくだらない事で笑い、ストレスを全く感じない毎日と両親に感謝しながら。

ここまで読んでくれたあなたにも感謝と一つの言葉を贈りたい。それは絶対に後悔しない人生を送ってほしい。たった一度の人生なのだから。

===

## 著者プロフィール

名前：ちゃんこま

趣味：サッカー,筋トレ,読書,カフェ巡り

実家で営んでいる美容院が経営悪化により失敗し自己破産。大学生当時、20年近く住んでいたマンションを売り学費が払えず大学を中退。あえなく就職し、工場勤務や営業など様々な労働地獄の波に吞まれる。

過酷な労働環境の中、会社員として働きつつ副業を始め、開始二ヶ月で23万円稼ぎサラリーマンの給料を超える。半年後には

月収30万円を超え、サラリーマン時の約2倍の収入を得る。その後報酬は100万円を超え、法人化へ。

これまでの経緯やノウハウを電子書籍化した結果、大手電子書籍掲載サイトにて、新着ランキングトップ10位入りの常連と化し、最高位二位を受賞。大きな反響を得る。現在は独立しオウンドメディア運営、情報ビジネス、webマーケティング関連など様々な事業を展開。節税の為に法人化するか現在検討中。

「会社に属さずとも、個人で自由に生きて行ける」をモットーに、誰にも雇われない自由な人生を送る。更に今後活躍が期待される注目株。